

§ 31 了解における現=存在

P.309-321

2020年3月2日 島村

§ 31.1 了解とは

世界=内=存在の了解

現存在は、つねに内=存在である道具的存在者と関わりあっている。さて、道具的存在者は、趣向性という存在性格を備えている。この趣向全体性はつきつめると主旨にたどり着く。(あるいは、道具的存在者は、さまざまな指示関係を構成するが、この指示関係は有意義性をかたちづくる。)そしてこの主旨および有意義性が現存在において開示されている。(詳しくは、18, 32節へ。)

被投的な可能性

現存在は自己の存在のいくつかの可能性をたえず断念し、あるいはそれらを掌握し、また掌握し損ねている。了解が心境的なものであり、また被投的に引き渡された了解という点からすれば、現存在はいつもつねに自分の道を誤り、自分を見損なっている。現存在の被投性は、いわば「投げ出されている」という人間の事実のおよび消極的側面を表す概念である。

了解するということは、存在可能を存在するということである

被投的な可能性は、現存在に「ひとごとでない自己の存在可能へむかって自由であることの可能性」が備わっていることを意味する。このような「存在可能を存在する」ということが、(実存論的には)了解することなのである。そしてこのとき、「この存在は、おのずからにして、おのれ自身の要所(おのれ自身が何に懸けられているか)を開示しているのである」(P.313)。

了解の投企的性格

「投企とは、事実的な存在可能の活動場面の存在構成である」(P.314)。すなわち、投企とは、自らの事実的な存在可能性(被投性)と関わり合いながら、存在可能を開示し、存在するということである(これによって世界=内=存在が構成される)。自らを投企するとは、自らの存在可能へ向かって身を投じることを意味する。

本来的な了解、非本来的な了解

「自分の世界の方から」自己を了解(投企)するのが非本来的了解(投企)であり、「自己自身の主旨から」自己を了解(投企)するのが本来的了解(投企)である。

§ 31.2 視 (Sicht)

Umsicht : 配視

Rücksicht : 省視

透視性

これは第一義的にかつ全体にわたって実存へ向かう視であり、「世界=内=存在を、そのすべての本質的構成契機をつらぬいてくまなく提示し、この開示態を了解的に掌握する」(P.318)のような「自己認識」を表す。